

令和元年6月29日現在

機関番号：34319

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16721

研究課題名(和文) 国際的文脈における戦後イタリア美術と文化的葛藤 芸術・産業・メディア

研究課題名(英文) Postwar Italian Art and Cultural Conflict in an International Context

研究代表者

池野 絢子 (IKENO, Ayako)

京都造形芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：80748393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1960年代のイタリアの芸術を、アメリカ型の資本主義社会の到来を背景とした、複数の文化間の葛藤の表現として考察することを試みた。とくに、ローマにおけるアメリカ美術の受容とイタリアの芸術家たちによるその変形について調査を進めた結果、彼らの作品には、アメリカのポップ・アートとの葛藤から生じたものがあることがわかった。またたとえば、南伊に古くから根付く呪術的儀礼のように、同時代のイタリアの芸術には、国際化の一方で、社会の均一化により失われていく地域固有の習俗や儀礼を取り込もうとした例が見受けられることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の対象とする1960年代は、芸術表現の多様化が進んだ時代であると同時に、芸術が今日のグローバルな文化状況へと推移していく上で重要な時期でもある。本研究では、イタリアでこの時期に展開された芸術が、アメリカからもたらされた芸術表現、イタリアにもともとあった図像の伝統、さらにまた、地域に固有の風俗など、さまざまな文化的関係性のもとで生じたことを指摘した。これにより、芸術の今日的展開を考える上での歴史的参照項を提示した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：In this project, I tried to consider Italian art in the 1960s as an expression of conflict between cultures when American-style capitalist society arrived in Italy. Through the research on how American art was accepted in Rome and how Italian artists translated it into their works, it was found that some of their works resulted from the conflict with American Pop art. Finally, I clarified that, although Italian art in 1960s was seem to follow international style, it tried to incorporate the regional customs and rituals that were lost due to social equalization, such as the magical ritual that had taken root in South Italy.

研究分野：美術史

キーワード：戦後イタリア美術 ポップ・アート 美術批評 アルテ・ポーヴェラ

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、戦後イタリアを代表する芸術運動「アルテ・ポーヴェラ」を対象として、彼らの制作が、自らの属する共同体への意識や、歴史的・文化的遺産への反省から、独自の「場」を形成していく過程について研究を進めてきた。「貧しい芸術」を意味するアルテ・ポーヴェラは、戦後のアメリカ型消費主義がイタリアはじめヨーロッパ諸国に到来したとき、アメリカ的な「豊かさ」に対して、あえて「貧しさ」の価値を打ち出した芸術運動であったとされる。そこからアルテ・ポーヴェラは、これまで複数の先行研究で、アメリカの覇権へのヨーロッパ側の抵抗の象徴として読解されてきた。すなわち、資本主義の恩恵に浴す「豊かな」芸術に対する「貧しい」芸術こそがアルテ・ポーヴェラであるという理解である。しかしながら、研究を進めるうちに、アルテ・ポーヴェラを冷戦期のヨーロッパとアメリカの文化対立という図式にあてはめるそうした理解は、一面的にすぎることが明らかになった。戦後のイタリア社会において、アメリカ文化に象徴される資本主義のモデルがもたらした文化的変容の重要性は疑いない。だが、たとえば初期にはポップ・アートの作家として紹介された芸術家ミケランジェロ・ピストレットや、「キッチュ」の文化的価値を論じた批評家ジッロ・ドルフレス、ウンベルト・エーコの言説が示しているように、イタリアにおける新しい文化・芸術の受容は、単に反発だけではない、より複雑な交渉の結果として理解されるべきである。

ここから私は、アルテ・ポーヴェラを含む 1960 年代イタリアの芸術状況を、同時代の複数の芸術実践や芸術批評を視野に入れながら、文化的葛藤の経過として再考すべきであるとの考えを得た。

2. 研究の目的

1960 年代は、メディウムの多様化という点で現代芸術にとって転換期であったと認識されているが、同時にこの時代には、芸術の世界的同時性が意識され、芸術が今日のグローバルな文化状況へと推移していく上で重要な時期でもある。本研究では、イタリアでこの時期に展開された前衛的芸術運動（アルテ・プログラマータ、新形象、アルテ・ポーヴェラ）を、ヨーロッパへのアメリカ型の資本主義のモデルの到来、映像メディアの発達、文化産業の進展等の社会的変質に関連付けて捉えることで、芸術の変容と社会の変化を文化的葛藤の経過として明らかにする。それによって、芸術のグローバル化という今日的な状況を考える上での歴史的準拠枠を提供することが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では 1960 年代イタリアの芸術における文化的葛藤の実態を、芸術批評と芸術実践という二つの次元から解明すること試みた。

まず芸術批評に関しては、当時イタリアにおける芸術の変容と社会的変化がどのように関連付けられていたのかを明らかにするため、ジュリオ・カルロ・アルガンやマウリツィオ・カルヴェージといった美術史家・批評家たちが、同時代芸術にどのような評価を下していたかを分析した。

次に、芸術実践に関しては、テクノロジーと芸術との統合を目指したミラノのグループ T やグループ N、および「アルテ・プログラマータ」の名称で呼ばれた動向、そしてポップ・アートの影響を受けたローマの芸術家たち（ピーノ・パスカーリ、マリオ・スキーファノら）を調査対象とした。これら二つの動向は、異なる性質を持ちながらも、産業社会に誕生した新しいイメージの領域を芸術に取り込もうとした点で一致している。

本研究では、以上のように、実践と批評言説を相互に検証し、1960 年代前半の新しい文化的モデルを芸術の領域に持ち込んだ芸術動向の把握に努めた。

4. 研究成果

本研究の成果は、内容的に大きく分けて「芸術とテクノロジー」、「アメリカ美術の受容と葛藤」の二つの内容からなる。

(1) 1960 年代のイタリアにおける芸術とテクノロジー

ブルーノ・ムナériが発案したアルテ・プログラマータのように、芸術とテクノロジーを融合させる動向がイタリア北部で登場した経緯や、その思想的背景を、関連資料の読解・分析および現地調査によって検証した。ここから、以下の二点が明らかになった。

キネティック・アートと北部の産業文化

タイプライターの製造で知られるオリヴェッティ社と、当時彼らの芸術を支持した美学者のウンベルト・エーコの受容理論が果たした役割を考察した。また、それらの動きに対する批判を検証することで、テクノロジーを用いた芸術が、北部の産業の隆盛と密接な関係のもとに生じた動きであったことを明らかにした。

戦前の未来主義と戦後のキネティック・アートの関係性

上記の研究を進めるうちに、これら戦後のテクノロジーと結びついた芸術動向と、戦前の未来主義が有したような機械観との共通性と断絶を明らかにする必要があることに気づいた。こ

のため、第二次世界対戦以前のイタリアの前衛芸術についても調査を進めた。ここから明らかになったのは、戦前の未来主義の生命力に溢れた機械 = 身体の表象と異なって、戦後において機械という存在は、コンピューター上の情報がそうであるように、ほとんど非物質的なものへと変化しているということであった。戦後のテクノロジーの伸長がもたらしたもっとも大きな変化とは、サイバネティクスが発想がそうであったように、それまでの物理的な機械技術にかかわって、脳や神経系の働きを模範にするような電子工学的・化学的モデルが登場したことである。このモデルと、エーコの考えた受容理論の関係性や、これらの作品の持つインタラクティブティの密接な関わりについて明らかにした。

(2) イタリアにおけるアメリカの芸術の受容と独自展開

1960年代のイタリアにおけるポップ・アートの受容に注目して研究を進めた。イタリアの若い芸術家たちは当時、アメリカの芸術に対して賞賛 / 否定の両極的の反応を示しており、とくにローマのポップ・アーティストたちはそのような文化間の葛藤という観点から興味深い事例である。ここから明らかになったのは以下の三点である。

当時のローマの美術界の状況と、イタリアのポップ・アートの出現の過程

ローマはすでに一九五〇年代から、アクション・ペインティングからネオ・ダダにいたるまでのアメリカ絵画の流行に、イタリア内ではもっとも開かれた土地だった。そうしたなかで登場するイタリアのポップ・アーティストたちは、イタリアの文化的記憶に根ざした図像を選択するという点で独自性を有していることを指摘した。

ピーノ・パスカーリの初期作品群の形成

パスカーリはアメリカ美術に強い影響を受けつつ、独自の彫刻群を制作した作家である。本研究では、パスカーリ財団のアーカイヴ資料を検証し、彼の「虚構の彫刻」と呼ばれるシリーズが、アメリカのポップ・アートとの交渉 / 葛藤のもとに形成されたものであることを明らかにした。

南部の文化の残存

前述の調査の過程で、パスカーリの制作には、アメリカ美術からの影響だけではなく、彼の出身であった南部に古くから根付く呪術的儀礼の影響が認められることを指摘した。ここからして、1960年代以降のイタリアの芸術には、国際化の一方で、社会の均一化により失われていく地域固有の習俗や儀礼を取り込もうとした例が見受けられることがわかった。この事例は、文化的混濁という観点からとりわけ興味深い点であり、サルデーニャの独自文化を背景とした制作で知られるマリア・ライ (1919-2013) など、他の芸術家の制作も視野にいれながら、今後検討していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

マッシモ・レオーネ (共訳: 池野絢子、片桐亜古) 「デザインの形而上学: デ・キリコ、キアロスタミ、小津安二郎におけるオブジェの感覚」、『京都造形芸術大学紀要 Genesis』、21号、34-46頁

〔学会発表〕(計 5 件)

池野絢子 「1960/70年代の都市と芸術 イタリアの事例から」シンポジウム「1970年前後、都市と芸術 ゴードン・マツァークラークを起点に」、東京国立近代美術館、2018年8月25日

池野絢子 「ピーノ・パスカーリのマジカル・ポップ 1960年代の芸術と文化的葛藤」、研究会「20世紀イタリアの芸術と文化」、京都造形芸術大学外苑キャンパス、2018年3月18日

池野絢子 「戦後イタリアの芸術における身体とテクノロジー 空間・環境・コミュニケーション」第六回「身体・記憶の共鳴」研究会、科学研究費基盤研究(B)「確率共鳴理論と集合的記憶概念の接続の試み: 身体現象を指標として」(代表: 中村靖子)、2018年2月17日

IKENO Ayako, "The Disappearance of Body: Art and Technology in Postwar Italy," *Mechanization and Anatomization of Representations of Body in the 20th Century Art*, 名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター, 2017年9月24日

IKENO Ayako, "Carlo Carrà: Between Primitivism and Classicism," *Avant-garde Art and Classicism from 1880 to 1945*, 名古屋大学人類文化遺産テキスト学研究センター, 2017年9月23日

〔図書〕(計 4 件)

池野絢子「ピーノ・パスターリと虚構の彫刻 1960年代イタリアにおける文化的葛藤と呪術的想像力」、中村靖子編『非在の場を拓く 文学が紡ぐ科学の歴史』春風社、2019年2月、269-305頁

IKENO Ayako, "Sensazione tattile di colori nelle opere di SAKURAI Shinya," *SHINYA SAKURAI Colors & Cultures*, GlobArt Gallery, 2018年11月

池野絢子「Viewpoints of Points | 「点展」について」、阿部真弓他『引込線』、引込線実行委員会、2018年1月、240-249頁

池野絢子「第18章「越境する戦後美術」、土肥秀行・山手昌樹編『教養のイタリア近現代史』ミネルヴァ書房、2017年5月、285-292頁

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。